

# 小春

国木田独歩

青空文庫



十一月某日それのひ、自分は朝から書齋にこもって書見をしていた。その書はウオーズウオル  
 ス詩集である、この詩集一冊は自分に取りて容易ならぬ関係があるので。これを手に入れ  
 たはずで八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜よであつた。ああ八年の歲月！ 憶おも  
 えば夢のようである。

ことにこの一、二年はこの詩集すら、わずかに二、三十巻しかないわが蔵書中であつて  
 もはなはだしく冷遇せられ、架上最も塵深ちりき一隅いちぐうに放擲ほうてきせられていた。否いな、一月に一  
 度ぐらひは引き出されて瞥べっけん見された事もあつたろう、しかし要するに瞥見たるに過ぎな  
 い、かつて自分の眼光を射て心靈の底深く徹した一句一節は空むなしく赤い線青い棒で標しるし点  
 けられてあるばかりもはや自分を動かす力は消え果てていた。今さらその理由を事ことごと々し  
 く自問し自答するにも当たるまい、こんな事は初めからわかつているはずである、『マイ  
 ケル』を読んでリウクの命運のために三行の涙をそそいだ自分はいつしかまたリウクを誘  
 うた浮世の力に誘われたのだ。

そして今も今、いと誇り顔に「われは老熟せり」と自ら許している。アア老熟！ 別に  
不思議はない、

『Man descends into the Vale of years.』

『人は歳月の谷間へと下る』

という一句が『エキスカルシヨン』第九編中であつて自分はこれに太く青い線すじを引いてる  
ではないか。どうせこれが人の運おさだまり命だろう、その証拠には自分の友人の中でも随分自  
分と同じく、自然を愛し、自然を友として高き感情の中に住んでいた者もあつたが、今で  
は立派な實際家になつて、他人ひとのうわさをすれば必ず『彼奴きやつは常コンモンセンス識しが乏しい』とか、  
『あれは事務家だえらいところがある』など評し、以前もとの話が出ると赤い顔をして、『あ  
の時はお互いにまだ若かつた』と頭をかくではないか。

自分がウォーズウォルスを見捨てたのではない、ウォーズウォルスが自分を見捨てたの  
だ。たまさか引き出して見たところで何がわかるう。ウォーズウォルスもこういう事務家  
や老熟先生にわかるようには歌わなかつたに違いない。

ところで自分免許のこの老熟先生も実はさすがにまるきり老熟し得ないと見えて、実際  
界の事がうまく行かず、このごろは家にばかり引きこもつていて多く世間と交わらない。

その結果でもあろうかウオーズウォルス詩集までが一週間に一、二度ぐらいは机の上に置かれるようになった。

さて十一月某日そのひ、自分は朝から書齋にこもって書見をしていた、とあらためて書き出す。

## 二

昨日きのうも今日きょうも秋の日はよく晴れて、げに小春こはるの天気、仕事するにも、散策を試みるにも、また書を読むにも申し分ない気候である。ウオーズウォルスのいわゆる

『一年の熱去り、気は水のごとくに澄み、天は鏡のごとくに磨みがかれ、光と陰といよいよ明らかにして、いよいよ映照せらるる時』

である、気が晴ればれする、うちにもどこか引き緊しまるころがあつて心が浮わつかない。断行するにも沈思するにも精いっぱいできる。感情も意志も知力もその能を尽くすべき時である。冬はいじけ春はだらけ夏はやせる人でも、この季節ばかりは健康と精力とを自覚するだろう。それで季節が季節だけに自分のウオーズウォルス詩集に対する心持ちがやや

変わつて来た、少しはしんみりと詩の旨を味わうことができるようである。自分は南向きの窓の下で玻璃ガラス越しの日光を避けながら、ソネットの二、三編も読んだか。そして『*ne Composed a few miles above Tintern Abbey*』の雄編に移った。この詩の意味は大略左のごとくである。

五年は経過せり。しかしてわれ今再びこの河畔かはんに立つてその泉流の咽むせぶを聴きき、その危巖のそびゆるを仰ぎ、その蒼そうてん天の地に垂たれて静かなるを觀みるなり。日は来たりぬ、われ再びこの暗く繁しげれる無花果いちじくの樹陰こかげに座して、かの田園を望み、かの果樹園を望むの日は再び来たりぬ。

われ今再びかの列樹なみきを見るなり。われ今再びかの牧場を見るなり。緑草直ちに門戸に接するを見、樹林の間よりは青煙しず閑かに巻きて空にのぼるを見る、樵夫しやうふの住む所、はた隠者の独座して炉に対するところか。

これらの美なる風光はわれにとりて、過去五年の間、かの盲者における景色のごときものにてはあらざりき。一室に孤座する時、都府の熱鬧場裡（ねつとうじょうり）にあるの日、われこの風光に負うところありたり、心屈し体倦うむの時に当たりにて、わが血わが心はこれらを懐おもうごとにかくに甘き美感を享うけて躍りたるぞ、さらに負うところの大

なる者は、われこの不可思議なる天地の秘義に悩まざるに当たり、これらの風光を憶（おも）うことによりて、その圧力を支え得たることなり。もしそれを憶うていよいよ感じ、冥想（めいそう）静思の極にいたればわれ実に一呼吸の機微に万有の生命と触着するを感じたりき。

もしこの事、単にわが空漠たる信念なりとするも、わが心この世の苦悩にもがき暗（あん）んたる儼（げん）たる日夜を送る時に当たりて、われいかにしばしば汝に振り向きたるよ、ああワイ！ 林間の逍遙子（しようようし）よ、いかにしばしばわが心汝に振り向きたるよ！

しかしてわれ今、再びここに立つ。わが心は独（ただ）に今のこの楽しさを感じるのみならず、実にまた来たるべき歲月におけるわが生命とわが食物とは今のこの時の感得中にあるべきなり。あえて望むはその感得の児童の際のごとからんことなり。

あの時は山羊のごとく然（しか）り山野泉流ただ自然の導くまに逍遙（しょうよう）したり。あの時は飛瀑（ひばく）の音、われを動かすことわが情のごとく、巖（いわ）や山（やま）や幽（ゆう）なる森林や、その色彩形容みなあの時においてわれを刺激すること食欲のごときものありたり。すなわちあの時はただ愛、ただ感ありしのみ、他に思考するところの者を藉（か）り来たりて感興を助くるに及ばざりしなり。されどかの時はすでに業（すて）に過ぎ逝（ゆ）きたり。

し。か。も。わ。れ。は。こ。の。経。過。を。唸。か。ず。哀。かな。し。ま。ぎ。る。な。り。わ。れ。は。こ。の。損。失。を。償。い。て。余。り。あ。る。者。を。得。た。り。す。な。わ。ち。わ。れ。は。思。想。な。き。児。童。の。時。と。異。な。り。今。は。自。然。を。観。る。こ。と。を。学。び。た。り。今。や。人。情。の。幽。音。悲。調。に。耳。を。傾。け。た。り。今。や。落。日。大。洋。清。風。蒼。天。人。心。を。一。貫。し。て。流。動。す。る。所。の。も。の。を。感。得。し。た。り。

か。る。が。故。に。わ。れ。は。今。な。お。牧。場。森。林。山。岳。を。愛。す。緑。地。の。上。窮。天。の。間。耳。目。の。触。る。所。の。者。を。愛。す。こ。れ。ら。は。み。な。わ。が。最。純。な。る。思。想。の。錨。わ。が。心。わ。が。靈。及。び。わ。が。徳。性。の。乳。母。導。者。衛。士。た。り。

あ。あ。わ。が。最。愛。の。友。よ。妹。ド。ラ。嬢。を。指。す。汝。今。わ。れ。と。共。に。こ。の。清。泉。の。岸。に。立。つ。わ。れ。は。汝。の。声。音。中。に。わ。が。昔。日。の。心。語。を。聞。き。汝。の。驚。喜。し。て。閃。く。所。の。眼。光。裡。に。わ。が。昔。日。の。快。心。を。読。む。な。り。あ。あ！。わ。れ。を。し。て。し。ば。し。な。り。と。も。汝。に。お。い。て。わ。が。昔。日。を。観。取。せ。し。め。よ。わ。が。最。愛。の。妹。よ！

そ。も。そ。も。ま。た。か。く。祈。る。所。以。の。者。は。自。然。は。決。し。て。彼。を。愛。せ。し。者。に。背。か。ざ。り。し。を。わ。れ。知。れ。ば。な。り。わ。れ。ら。の。生。涯。を。通。じ。て。歡。喜。よ。り。歡。喜。へ。と。導。く。は。彼。の。特。權。な。る。を。知。れ。ば。な。り。彼。よ。り。享。く。る。所。の。静。と。美。と。高。の。感。化。は。世。の。毒。舌。妄。斷。もう。だ。ん。嘲。罵。輕。蔑。を。し。て。わ。れ。ら。を。犯。さ。し。め。ず。わ。れ。ら。の。樂。し。き。信。仰。を。擾。み。だ。る。な。か。ら。し。む。



るを。知。れ。ば。な。り。

か。る。が。故。に、月。光。を。し。て。汝。の。逍。遙。を。照。ら。し。め。よ、霧。深。き。山。谷。の。風。を。し。て。ほ。し。い。ま。ま。に。汝。を。吹。か。し。め。よ。汝。今。日。の。狂。喜。は。他。日。汝。の。裏。に。熟。し。て。莊。重。深。沈。な。る。歡。と。化。し。汝。の。心。は。ま。さ。に。し。き。千。象。の。宮、静。か。な。る。万。籟。の。殿。た。る。べ。し。

あ。あ。果。た。し。て。し。か。ら。ん。か、あ。る。い。は。孤。独、あ。る。い。は。畏。懼、あ。る。い。は。苦。痛、あ。る。い。は。悲。哀。に。し。て。汝。を。悩。ま。さ。ん。時、汝。は。ま。さ。に。わ。が。こ。の。言。を。憶。う。べ。し。

他。日。も。し、わ。れ。ま。た。汝。を。見。る。あ。た。わ。ざ。る。の。地。に。あ。ら。ん。か、汝。ま。さ。に。わ。れ。と。共。に。こ。の。清。泉。の。岸。に。立。ち。し。こ。と。を。忘。る。な。か。れ。

ま。ず。ザ。ツ。ト。こ。う。い。う。意。味。で。あ。る。自。分。は。繰。り。返。し。て。読。ん。だ。そ。し。て。ど。う。い。う。句。に。最。も。強。く。ア。ン。ダ。ー。ラ。イ。ン。し。て。あ。る。か。と。見。れ。ば、最。初。の『五。年。は。経。過。せ。り』の。一。句。及。び『わ。が。心。は。独。に。今。の。こ。の。楽。し。さ。を。感。ず。る。の。み。な。ら。ず、実。に。ま。た。来。た。る。べ。き。歳。月。に。お。け。る。わ。が。生。命。と。わ。が。食。物。と。は。今。の。こ。の。時。の。感。得。中。に。あ。る。べ。き。な。り』の。句。を。始。め。と。し。て『自。然。は。決。し。て。彼。を。愛。せ。し。者。に。背。か。ざ。り。し』の。句。の。ご。と。き、そ。し。て

Therefore let the moon

Shine on thee in thy solitary walk;  
 And let the misty mountain winds  
 be free to blow against thee.

の句に至つては二重にも線が引いてある。何のために引いたか、そもそもまたこの濃い青い線をこれらの句の下に引いたのは、いつであるか。

『七年は経過せり』と自分は思わず独語した。そうだ。そうだ！ 七年は夢のごとくに過ぎた。

## 三

自分が最も熱心にウオーズウォールズを読んだのは豊後の佐伯にいた時分である。自分は田舎教師としてこの所に一年間滞在していた。

自分は今ワイ河畔の詩を読んで、端なく思い起こすは実にこの一年間の生活及び佐伯の風光である。かの地において自分は教師というよりもむしろ生徒であった、ウオーズウォ

ルスの詩想に導かれて自然を学ぶところの生徒であった。なるほど七年は経過した。しかし自分の眼底にはかの地の山岳、河流、溪谷、緑野、森林ことごとく鮮明に残っていて、わが故郷の風物よりも幾倍の色彩を放っている。なぜだろう？

『月光をして汝の逍遙を照らさしめ』、自分は夜となく朝となく山となく野となくほとんど一年の歳月を逍遙に暮らした。『山谷の風をしてほしいままに汝を吹かしめよ』、自分はわが情とわが身とを投げ出して自然の懐に任した。あえて佐伯をもつて湖畔詩人の湖国と同一とはいわない、しかし湖国の風土を叙して

そこには雨、心より降り、晴るる時、一段まばゆき天氣を現わし、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし滝は響き、泉も滝も、水あふるれど少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帯べり、

とウォーズワオルスが言いしを真とすればわが佐伯も実にその通りである。

往々雨の丘より丘に移るに当たりて、あるいは近くあるいは遠く、あるいは幽くあるいは明らかに、

というもまた全く同じである、もしそれ雲霧を説いて

あるいは黙然遊動して谷より谷に移るもの、往々にして動かざる自然を動かし、変

わらざる景色を変え、塊然たる物象を化して夢となし、幻げんとなし、霊となし、怪となし、  
というに至っては水多く山多き佐伯また実にそうである、しかししいてわが佐伯をウオー  
ズウォルスの湖国と対照する必要はない。手帳ノートブックと鉛筆とを携えて散歩に出掛けたスコ  
ットをばあざけりしウオーズウォルスは、決して写實的に自然を觀みてその詩中に湖国の地  
誌と山川草木を説いたのではなく、ただ自然その物の表象變化を觀てその真髓の美感を詠  
じたのであるから、もしこの詩人の詩文を引いて対照すれば、わが日本國中数えきれぬほ  
どの同風光を見いだすだろう。

ただ一言げんする、『自分が真にウオーズウォルスを読んだは佐伯におる時で、自分がかもつ  
とも深く自然に動かされたのは佐伯においてウオーズウォルスを読んだ時である』という  
ことを。

爾來じらい数年の間自分は孤独、畏懼いぐ、苦惱、悲哀のかずかずを尽くした、自分は決して幸福  
な人ではなかった、自分の生活ライフは決して平坦へいたんではなかった。『ああワイの流れ！ 林間  
の逍遙子よ、いかにしばしばわが心汝に振り向きたるよ！』その通りであつた。わが心は  
これらの圧力を加えらるることにしばしば藩匠はんしゅ川畔はんの風光を憶おもつた。

今やいかに、今やいかに、わがこの一、二年の生活はほとんど佐伯を忘れしめ、しかし

てたまさかに佐伯を憶えばあの時の生活はわれながらわれのごとくには思われなくなった。

#### 四

自分は詩集をそのままにして静かに佐伯のことを憶いはじめた。さすがに忘れ果ててはいない、あの時の事この時のこと、自分の繰り返した逍遙の時を憶うにつけてその時自分の目に彫り込まれた風光は鮮やかに現われて来る、画を見るよりも鮮明に現われて来る。秋の空澄み渡つて三里隔つる元越山の半腹からまつすぐに立ち上る一縷の青煙すら、ありありと目に浮かんで来る。そこで自分は当時の日記を出して、かしここと拾い読みに読んではその時の風光を思い浮かべていると

『兄さんお宅ですか』と戸外から声を掛けた者がある。

『お上がり』と自分は呼んでなお日記を見ていた。

自分の書齋に入つて来たるは小山という青年で、ちょうど自分が佐伯にいた時分と同輩の画家である、というより画家たらんとて近ごろ熱心に勉強している自分と同郷の者である。彼は常に自分を兄さんと呼んでいる。

『ご勉強ですか。』

『いや、そうじゃアない、今ウオーズウォールズを読んで佐伯のことを思い出したから日記を見ていたところだ。』

『どうです散歩にお出になりませんか、今日は写生しようと思つて道具を持って来ました。』

『なるほど、将几しょうぎができたね。』

『やつと買いました、大枚一円二十五銭を投じたのですがね、未だいま一度しか使つて見ませ  
ん。』

と畳んで棒のごとくする檜かしのの将几を開いて見せた。

『いよいよ本式になつたナ』と自分は将几と小山とを見比べて言つた。

『そうです、もうここまで行けば後あとへは退ひけません』と言ひ放つたが何となくかれの顔色はすぐれなかつた、というものはそのはずだ、彼は故郷なる父母の意に反してその将来を決しているからである。画えに対する彼の情は燃ゆるようで、ほとんど本気のさたかと彼の友は疑うほどである。これまで彼は父母の意に従つて高等学校に入るべき準備をしていた時でも、三角に対する冷淡は画に対する熱心といつも両極をなしていた。さらにさかのぼ

つて、彼の小学校にある時すら彼は画のみを好んでおつたのを自分は知っている。この少年に向かつて父母は医師たらんことを希望しているのである。彼は父母の旨を奉じて進んで来た。しかるに幸か不幸か、彼の健康はいかにしても彼の嗜好に反する學術を忍んで学ばほどの弾力を有していない。彼は二年間に赤十字社に三度入院した。医師に勧められて三度湯治に行つた。そしてこの間彼の精神の苦痛は身体の病苦と譲らなかつたのはすなわち彼自身その不健康なるだけにいよいよ将来の目的を画家たるに決せんと悶いたからである。

それでこのごろは彼も煩悶の時を脱して決心の境に入り着々その方に向かつて進んで来たが未だ故郷の父母にはこの決心を秘しているのである。彼がややもすると不安の色を顔に示すはこの故である。

『ナニ画のためになら倒れてやむだけの覚悟はもう決めていきますから平気です、』と彼は言いだしてさびしく笑つた。

『君のことだからそうだろう。』

『そうですとも、ほんとにね兄さん、昨日も日が西に傾いて窓から射しこむと机の上に長い影を曳いて、それをぼんやり見ていると何だか哀れっぽい物悲しい心持ちがして来ました

が、ふと画の事を考えて、そうだ今だとすぐ画板を引つ掛けて飛び出しました。画のためとならわたくし小生はいつでも気が勇み立ちます、』と行って彼はその蒼白あおしろい顔に得意の微笑を浮かべた。

彼は画板の袋から二、三枚の写生を取り出して見せたが、その進歩はすこぶる現われて、もはや素しろうと人の域を脱しているようである。

『どうです散歩に出しましょう、今日は何だか霞かすみがかつてまるで春のようですよ。』と小山は自分を促した。

『そう、もうじき昼だから飯を食つてからにしよう』と自分は小山を止めて、それよりウオーズウォルスの詩について自分の観みるところを語った。

『ちようど君の年だった、僕がウオーズウォルスに全心を打ちこんだのは。その熱心の度は決して君の今画に対する熱心に譲らなかつた。君が画板を持って郊外をうろつきまわっているように、僕はこの詩集を懐ふところにし佐伯の山野さんやを歩き散らしたが、僕は今もその時の事を思いだすと何だか懐なつかしくつて涙がこぼれるような気がするよ』と自分はよい相手を見つけたので、さつきから独ひとりで憶おもい浮かべていた佐伯の自然について、図まで引いて話した。



同じ自然の崇拜者である、彼は画によって、自分は詩に導かれて。自分の語るころは彼によくわかる。彼の問うところは自分の言わんと欲するころ。

『まずそんなあんばいでただもう夢中であつた。しかし君と異うのは、君は観るとすぐ画きたくなる僕はただ感ずるばかりだ。それで君は時とすると自然の美のあまりに複雑して現われているのに圧倒せられてしまふ、僕にはそんなことはない、君は自然を捉えようと試みる、僕は観て感じ得るだけを感じる、だい僕の方が楽だ。時によると僕も日記中に君の見取り図くらいなところを書きとめたこともあるが、それは真の粗雑としたものだ。』

『そのスケッチが見とうございませぬ、』と小山の求めるままに十一月三日の記から読みだした。

『野を散歩す日暖かにして小春の季節なり。櫛紅葉は半ば散りて半ば枝に残りたる、風吹くごとに閃めき飛ぶ。海近き河口に至る。潮退きて洲あらわれ鳥の群、飛び回る。水門を下ろす童子あり。灘村に舟を渡さんと舷に腰かけて潮の来るを待つらん若者あり。背低き櫛堤の上に樹ちて浜風に吹かれ、紅の葉ごとに光を放つ。野末はるかに百舌鳥のあわただしく鳴くが聞こゆ。純白の裏羽を日にかがやかし鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹なり。その昔に小さき島なりし今は丘となりて、その麓には林を周らし、山鳩の栖処にふさわ

しきがあり。その片陰に家数二十には足らぬ小村あり、浜風の衝に当たりて野を控ゆ。』

その次が十一月二十二日の夜

『月の光、夕の香をこめてわずかに照りそめしころ河岸に出ず。村々浦々の人、すでに舟とともに散じて昼間のさわがしきに似ずいと寂びたり。白馬一匹繋ぎあり、たちまち馬子来たり、牽いて石級を降り渡し船に乗らんとす。馬懼れて乗らず。二三の人、船と岸とにあつて黙してこれを見る。馬ようやく船に乗りて船、河の中流に出ずれば、灘山の端を離れてさえさえと照る月の光、鮮やかに映りて馬白く人黒く舟危うし。何心なくながめてありしわれは幾百年の昔を眼前に見る心地して一種の哀情を惹きぬ。船回りし時われらまた乗りて渡る。中流より石級の方を望めば理髪所の燈火赤く四圍の闇を隈どり、それが前を少女の群れゆきつ返りつして守唄の節合わするが聞こゆ。』

その次が十一月二十六日の記、

『午後土河内村を訪う。堅田隧道の前を左に小径をきり坂を越ゆれば一軒の農家、山の麓にあり。一個の男、一個の妻、二個の少女麦の肥料を丸めいたり。少年あり、藁を積み重ねし間より頭を出して四人の者が余念なく仕事するを余念なくながめいたり。渡頭を渡りて広き野に出ず。野は麦まきに忙しく女子みな男子と共に働きいたり。山の麓に見ゆる

は土河内村なり、谷迫りて一寰区かんくをなしことさらに世と離れて立つかのごとく見ゆ、かつて山の頂いただきより遠くこの村を望み炊煙の立ちのぼるを見てこの村懐かしくわれは感じぬ。村に近づくにつれて農夫ら多く野にあるを見たり。静けき村なるかな。小児の群れの嬉戯きぎせるにあいぬ。馬高くいななくを聞きぬ。されど一村寂然たり。われは古き物語の村に入ることがとき心地せり。若者一個庭前にて何事をかなしつつあるを見る。礫多こいしき路みちに沿いたる井戸の傍かたわらに少女おとめあり。水枯れし小川の岸に幾株の老梅並び樹たてり、柿かきの実、星のごとくこの梅樹うめの際きわより現あわる。紅葉もみじ火のごとく燃えて一叢ひとむらの竹林を照らす。ますます奥深く分け入れば村窮きわまりてただ溪流の水清く樹林の陰より走はせ出いずるあるのみ。帰路せきよう夕陽野にみつ』

自分は以上のほかなお二、三編を読んだ。そしてこれを聴きく小山よりもこれを読む自分の方が當時を回想する情に堪たえなかつた。

時は忽然こっぜんとして過ぎた、七年は夢のごとくに経過した。そして半熟先生ここに茫然ぼうぜんとして半ば夢からさめたような寝ほけ眼まなこをまたたいている。

午後二人は家を出た。小山は画板を肩から腋へ掛け、たみしようぎ 畳将 几を片手に、くすりびん 薬 壘へ水を入れてハンケチで包んだのを片手に。自分はウオーズウオルス詩集を懐ふところにして。

大空は春のように霞かすんでいた。プルシャンブリューでは無論なしコバルトでも濃い過ぎるし、こんな空色は書きにくいと小山はつぶやきながら行った。

野に出て見ると、秋はやはり秋だ。ならはやし 榎 林は薄く黄ばみ、農家の周囲に立つ高い櫟けやきは半ば落葉してその細い網のような枝を空にすかしている。丘のすそをめぐる萱かやの穂は白しろか銀ねのごとくひかり、その間から武蔵野むさしのにはあまり多くない櫛はじの野生がその真紅の葉を点てん出しゅつしている。

『こんな錯雑した色は困るだろうね』と自分は小さな坂を上りながら頭上の林を仰いで言った。

『そうですね、しかしかえってこんな色の方がごまかされて描かきよいかもかもしれません、』  
と小山は笑いながら答えた。

『下手な画工へたが描かきそうな景色というやつに僕は時々出あうが、その実、実際の景色はなかなかいいんだけれども。』

『だから下手が飛び付いて描くのですよ、自分の力も知らないで、ただ景色のいいに釣られてやるのですからでき上がって見ると、まるで景色の外<sup>うわつら</sup>面<sup>なまく</sup>を塗抹<sup>なすく</sup>った者になるのです。』

『自然こそいい迷惑だ、』と自分は笑った。高台に出ると四辺<sup>あたり</sup>がにわかにかけて林の上を隠<sup>みえがくれ</sup>見<sup>み</sup>に国境の連山<sup>かす</sup>が微<sup>かす</sup>かに見える。

『山!』と自分は思わず叫んだ。

『どこに、どこに、』と小山はあわただしく問うた。自分の指さす方へ、近眼鏡を向けて目をまぶしそうにながめていたが、

『なるほど山だ、どうですこの瞬<sup>かす</sup>かな色は!』ときも懐<sup>なつ</sup>かしそうに叫んだ。

この時自分の端<sup>はし</sup>なく想<sup>おも</sup>い出したのは佐伯にいる時分、元越山の絶頂から遠く天外を望んだ時の光景である。山の上に山が重なり、秋の日の水のごとく澄んだ空気に映じて紫色に染まり、その天<sup>てん</sup>末<sup>まつ</sup>に糸を引くがごとき連峰の夢よりも淡きを見て自分は一種<sup>メランコリー</sup>の哀<sup>あはれ</sup>情<sup>じやう</sup>を催し、これら相重なる山々の谷間に住む生<sup>せい</sup>民<sup>みん</sup>を懐<sup>おも</sup>わざるを得なかつた。

自分は小山にこの際の自分の感情を語りながら行くと、一<sup>ひとすじ</sup>条<sup>じやう</sup>の流れ、薄暗い林の奥から音もなく走り出<sup>い</sup>でまた林の奥に没<sup>ぼつ</sup>する畔<sup>ほとり</sup>に來た。一個の橋がある。見るかげもなく破れ

て、ほとんど墜ちそうにしている。

『下手な画工が描きそうな橋だね』と自分は林の陰からこれを望んで言った。

『私が一つ描いて見ましようか。』

『よしたまえな、ありふれてるから。』

『しかしこんな物でも描かなければ小生の描く物がありません。』

そこで小山はほどよき位置を取つて、将凡を置き自分には頓着なく、熱心に描き

始めた。自分は日あたりを避けて檜林の中へと入り、下草を敷いて腰を下ろし、わ

が年少画家の後ろ姿を木立ちの隙からながめながら、煙草に火をつけた。

小山は黙つて描く、自分は黙つて煙草をふかす、四囲は寂然として人声を聞かない。

自分は懐から詩集を取り出して読みだした。頭の上を風の吹き過ぎるごとに、檜の枯れ葉

の磨れ合う音ががさがさとするばかり。元来この檜はあまり風流な木でない。その枝は粗、

その葉は大、秋が来てもほんのりとは染まらないで、青い葉は青、枯れ葉は枯れ葉と、乱

雑に枝にしがみ着いて、風吹くとも霜降るとも、容易には落ちない。冬の夜嵐吹きすさ

ぶころとなつても、がさがさと騒々しい音で幽遠の趣をかき擾している。

しかし自分はこの音が嗜きなので、林の奥に座して、ちよこなんとしていると、この音

がここでもかしくでもする、ちやうど何かがささやくようである、そして自然の幽寂  
 がひとしお心にしみわたる！

自分はいつしか小山を忘れ、読む書にもあまり身が入らず、ただ林の静けさに身をまか  
 していると、何だか三、四年前<sup>ぜん</sup>まで、自分の胸に響いたわが心の調べに再び触れたような  
 心持ちがする。

『兄さん！』と小山は突然呼んだ、『兄さん、人の一生を四季にたとえるようですが、春  
 を小生<sup>わたし</sup>のような時として、小春は人の幾歳ぐらいにたとえていいでしょう』と何を感じた  
 か、むこうへ向いたまま言った。

『秋かね？』

『秋と言わないで、小春ですよ！』

『僕のようなのが小春だろう！』と自分は何心なく答えて、そしてわれ知らず、未<sup>いま</sup>だかつ  
 て経験した事のない哀情が胸を衝<sup>つ</sup>いて起こった。

『君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が来るだろうよ！』

『ハハハハ冬が過ぎればまた春になりますからねエ』と小山はさも軽<sup>かるがる</sup>々と答えた。

四<sup>あたり</sup>囲は再びひっそりとなつた。小山は口笛を吹きながら描いている。自分は思った、む

しろこの二人が意味ある画題ではないかと。

(明治三十三年十一月作)



# 青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「中学世界」

1900（明治33）年12月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年8月7日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小春

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>